RE START
太田哲也の10年

［連載4回］

TEXT●中三川大地(Daichi Nakamigawa)
PHOTO●田中秀宣(Hidenobu Tanaka)
高橋 学(Manabu Takahashi)

諦めない精神

太田哲也が体験した大事故と時をはぼ同じくしてオートバイで事故に遭い、プロライダーとしての道を断たされた男がいる。彼の名は青木拓磨。ただが、彼はレースの道を諦めたりはしなかった。2輪が駄目なら4輪へ、優れた運転補助装置を手に入れ、今もレーシングドライバーとして生き続け、今回、事あることに太田哲也とも助け合い支え合う。青木拓磨の精神に迫る。

1997年のレースシーズンが終わったある日のこと。レーシングドライバー（ライダー）として世界に羽ばたくふたりの男が杯を交わしていた。ひとりは青木拓磨選手。この年、ロードレース世界選手権GP500クラスでシーズン5位を獲得し、来期への期待を募らせていた。そして太田哲也だ。1997年は自らのチームを持って全日本GT選手権GT300クラスに参戦した。前年は連続の疲れによる戦闘力不足に苦しんだが、あれよあれよという間に速さを身につけ、最終戦のオールスター戦では優勝を果たす。「鈴鹿サンデーシリーズチャンピオン」とお互いが誇い。それが現実味を帯びるほどの手応えを感じていた。

しかし翌1998年は、ふたりの男にとって、人生のベクトルを大きく歪ませた出来事が襲いかかる。開幕前のテスト中の事故で骨盤を損傷し、下半身不随となった青木拓磨選手と、太田哲也の事故が続いたのである。あの日の夜、語り合った夢や目標が、共に雲からスルリと滑り落ちていったのだった。

あれから14年が経ったいまふたりの男は笑顔で談笑している。今まで誰を寄いしばるような別力を重ね、無多の困難を乗り越えてきたことを感じさせない、穏やかで朗らかな笑顔が印象的だった。

太田が定期的に行うエンジョイ&セーフティドライビングレッスン・サポーテッドby三菱には、たびたび青木選手が講師として参加する。安全運転を学ぶ場であり同時に参加型モータースポーツの普及を目指すこの活動は、青木選手の思惑とも合致する。太田は青木選手のことを「超感覚派ドライバーだ」と言いながら、それでも理論を重視する場に欠くのは、そうした感覚の会話と共に、運転技術に対しても一目置いているからだと思う。

この日、事故後の彼らの活動に欠かせないクルマの進化を、影で支えてきた人々の元を訪れた。ここは故郷を中心とした自動車販売ディーラーワークを展開するかたわらで、ヨーロッパ製の運転補助装置「Guide simplex（ガイド・シンプレックス）」や「ドライブガイド」を輸入販売するジー・エス・ティーである。

下半身が動かない青木選手にとって、運転の際にこうした補助装置は必須である。両手でアクセルとブレーキはおろか、時にクラッチ操作をも担うのだ。こうした補助装置はガイド以外にも存在するが、他社製品はクラッチ操作を伴わないAT用がほとんど。よってガイドは、マニュアル車を欲する者にとっては貴重な存在だ。太田はガイドを、マニュアル車のヒール&トゥを正確かつ迅速に行うために使う。TEZZOのコンプリートカーであるアルファ159には、シフトノブにクラッチ操作を行うレバーが設けられている。

「ボクは事故に遭ったからといって、レースを引退したとは一度も思ったことがない。バイクが駄目ならクルマへ。ごく自然な流れだった」

8歳の頃からバイクにまたがりレース漬けの生活を送ってきた青木選手にとって、レースのない人生は考えられなかったという。彼の歴史を紐解くと、2007年のアジアクロスカントリーラリーへの出場から公式戦に復帰している。その挑戦は決して平坦な道ではなかった。

「事故に遭った翌年にはすぐに四輪のドライバーライセンスの申請をしたんです。だけど駄目だった。万が一の際に自力で車両から脱出できないことがネックになった。悪い起こせばこの頃は目標喪失でしたね」

その青木選手を救う大きなきっかけになったのが、同じくレース中の事故によって下半身不随となった元フェラーリのF1ドライバー、クレ

イ・レガッツォーニ氏であった。イベントのゲストで来日した彼の元を訪れ、謝することなく思いの丈をぶつけたことで、青木選手は再び意欲を取り戻していく。

「彼が事故に遭ったのは1980年です。最初は免許すら取れなかったと聞きました。当時彼の住んでいたイタリアは、マニュアル車ばかり。足の動かない人間にクルマの運転などできるものか、と、門前払いだったそうですよ。でも、彼は決して諦めなかった。マニュアル車対応のガイドを通ったとき口説き落として免許を発行してもらい、そればかりかちゃんとレースにまで復帰した。彼にできて、僕にできないことはない。ボクは彼に触発されたからこそ、諦めずにレースを続けてこられた」

この瞬間が、青木拓磨のリ・スタートであった。レガッツォーニ氏が進化させてくれたガイドが日本で手に入ると知り、かつシグナルスタートや温度のないラリーレイドなら、それも海外に目を向ければ出場の見込みがあると分かってきた。

それは太田にしても近い部分がある。大きく異なる点は、太田にとってレースは、小さな頃から肌に染みついた生活の一部ではなく、職業上での選択肢だったということ。だから事故の体験を経て、レースの関連した業界から全を洗うという道が浮かんだ時期もあった。

「それでも自分が復帰するためには、やはりレースが必要だったんだ」

太田は言う。自分にとって運転するのは歩くことや走ることと同じような生活習慣だと繰り返し言っている。だが、サーキットともなると、やはり幾多の試行錯誤が必要だった。

事故後のリハビリによって通常の運転には支障がないほど回復したものの、右足が思うように動かずヒール&トゥができなかった。そのため復帰当初に積んだアルファ・チャレンジには2ペダルMT（セレスピード）のマシンを選んだ。3ペダルを走らせる際には、リハビリを別当した理学療法士が考案し自作した補助装置を付けて走った。これは右足爪先とレーシングスーツにゴムヒモを括りつけて右足の筋肉の代わりをさせる、いわばお手製のガイドのようなものだった。

そうした彼らの相談に乗りながらガイドを開発してきたジー・エス・ティーの山形社氏はこう言う。

「いきなり青木選手から『タイに来てガイドを作ってくれ』って言われ、びっくりしました。だけど彼の揺るぎない気持ちに押され、仕事の範疇を超えて共に挑戦しました」

ガイドはヨーロッパでも前近いシェアを持つ運転補助装置だが、日本での認知度はまだまだだ。にも関わらず20年近くもガイドを導入してきた背景には、ジー・エス・ティーの代表取締役を務める佐々木公明氏の揺るぎない想いがあった。

「ガイドは優れた装置です。マニュアル車に対応するというだけではなく、取り外しが容易だから健常者と車両を共有できます。手間を考えると個人にならないことばかりですが、我々がパイオニアとして継続させることに意義があると考えています」

そして佐々木氏は「自分のライフワークだ」とも付け加えた。こうした周りの努力があったからこそ、青木選手は再び複雑台に立てたのだ。

現在、青木選手はスーパー耐久に参戦する国際レーシングドライバーであり、かつ「レン部」というミニバイクレースイベントを主催するなど精力的に活動する。レガッツォーニ氏が成し得なかった「いつかはル・マン24時間に出たい」という目標も持っている。大回もまた同様だ。クルマに対する安全意識改革と共に、クルマが持つ魅力の再認識、などよりチャレンジの大切さを、様々な活動を通して訴え続けている。

ともあれ、ガイドのカタログを眺め「どうすればもっとシフトチェンジがスムーズにできるか」を語り合ったりはマシンをセットアップするレーサーの表情そのものだ。14年前に語り合った夢は軌道修正を強いられたが、それでも常に前向きな彼らに心から敬意を覚え、溢れるエネルギーには感嘆される。

「カーレースは他の様々なスポーツと違い、老若男女やハンディの有無関係なく同じ土俵で闘える、大切なのはクルマを楽しもうとする気持ちと、諦めない精神」と、ふたりが口を揃えて言っていたのが印象深い。

青木拓磨

あおきたくま。レーサー。8歳の頃からレースの世界に入り、1988年にプロデビューを果たす。95、96年には全日本ロードレース選手権スーパーバイククラスでチャンピオンに輝く。97年のロードレース選手権GP500クラス1位を獲得するが、翌年練習走行中に事故に遭ってしまう。

ジー・エス・ティーの山形社長（写真右）は、現役にも以前太田のレース活動にも携わっていた人物。ガイドの装着やセッティングでは、ユーザーの要望に即した対応で信頼は厚い。

PHOTO●高橋 学

青木拓磨の活動

青木氏は事故の後、4輪のプロドライバーへと転向する。2002年にはアジアクロスカントリーラリーに出場、03年には中東ドバイ・ラリーへ参戦する。ライセンスの問題が解除され直後にーエスへの出場が可能になった頃まよ、スーパー耐久に復帰。今年は、3時オダワリ、かりうスポ本を駆って、ST1クラスに参戦中。同時にレンタルのミニバイクによる耐久レース（レン部）も主催、モータースポーツの普及に貢献している。

"Guidosimplex"とは？

現在あに装着するクルマにはガイドシステムが装着されている。青木氏のキャノー・コンボスはDPSのため、アクセルおよびブレーキ操作をひとつのレバーの受け持つワンペダルレバーが装着される。また太田氏のアルファ156はシーケンシャル操作、シフトメブにクラッチペダルに相当するレバーが設けられている。それぞれレバーはモーターユニットに連結し、モーターのみでクラッチペダルを動かす。慣れれば片手で操縦に専念できるというもの。

COOPERATION／青木拓磨オフィシャルサイト http://www.takuma-gp.com/ KEEP ON RACING http://www.keep-on-racing.com/